

## 空

空をまだらに覆う高い雲はゆっくりと浮動し  
午後の陽射しに何気ないお節介をする  
その下を孤立した雲の切れ端が  
上空の雲の経路と交叉して  
そそくさと流れてゆく

たかだか1世紀に満たぬ生命  
その中で革新を遂げることなど  
奇跡に近いはずだが  
あたかも自分に託されたかのように  
次へと引き継ぐに足り得るものを模索する

増してゆく加速度を減じさせることなど  
誰にもできない  
そして同時に  
行き着く先がたとえ破滅だと分かっている、なお  
その加速度から逃げ出すことも・・・

おお、かつては友人だったお前、雲よ  
今や、我々を温室を守る屋根屋根だけでなく  
我々を幻覚によって盲目とする  
見えない培養液までもが  
お前の姿を遮り、平面に閉じ込めている

おお、かつては無限の憧憬を受けとめていた空よ  
今、私の傍らでまどろんでいる飼い猫のように  
いずれお前は  
単なる、変換された色彩模様として  
我々の掌の上から、風に飛ばされてしまうこととなるのか

監視と、解析と、合理的予測が  
神として君臨しようとする我々を追い抜き  
蹴り飛ばし  
恩知らずの征服者として取って代わる  
その時は近い

(2009.2.7)